

## 奈良時代のヒツジの造形と日本史上の羊

廣岡孝信

## 目次

I. はじめに	29
II. 動物学的視点からみたヒツジとヤギ	29
III. 飛鳥・奈良時代の「羊」とヒツジの造形	29
IV. 考古資料のヒツジ	30
V. 平安時代の「羊」	32
VI. 中世の「羊」	35
VII. 近世以降の「羊」	36
VIII. まとめ	36

## 論文要旨

日本列島には、元来、ヒツジは生息していなかったことが、『三国志』『魏書』の東夷伝（いわゆる魏志倭人伝）の中に記されており、『日本書紀』などによると、推古朝になって百済からの贈り物として初めて日本にやってきたことが記録されている。珍獣や霊獣が良好な外交関係における重要な役割を果たすことは、すでにこの時代も認識されていたといえる。その後、奈良時代には正倉院宝物にも、ヒツジの意匠が取り入れられて、かなりの好評を博したことがうかがえる。この状況は考古資料からも窺い知ることができ、硯とされる須恵質の製品にヒツジの頭部をあしらった出土品が平城京をはじめ、各地の官衙遺跡などで確認されている。ところが平安時代になると、考古資料にはヒツジの意匠を確認できず、文献史料上では、ヒツジにまつわる流行病が恐れられていたことが記録されている。時を同じくしてこの時代の図像には、ヒツジとは思えぬ姿の「羊」像が描かれはじめていることから、時代の変化に伴ってヒツジを巡る扱い・理解に変化があったことが認められる。本稿では、中世～近世の図像資料・彫刻資料も検討に含めて、動物学的な視点と通史的な視点から、ヒツジに対する日本国内での認識を整理し、奈良時代におけるヒツジの造形物の歴史的意義を評価する。

廣岡孝信（ひろおか たかのぶ）

奈良県立橿原考古学研究所 指導研究員

## I. はじめに

日本史上の「羊」<sup>1)</sup>の初出は、文献史料によると6世紀末の推古朝(599年:表1。以下の各年の事項・出典は表1参照)であり、百済からの貢物として日本へ連れてこられたと記される<sup>2)</sup>。このような国境を越えての貢物としての動物は、当時の国際的な外交の友好を促進する際の、象徴的な贈答品・霊獣として扱われ、それらの動物を受け入れた国では、限定された特権階級だけが、生きた動物個体を目にする機会を享受できたとされる(川添2009)。ここで取り上げるヒツジも、日本では長らく一般庶民の目に触れることはなく、国内での本格的な繁殖・家畜化を成功させるには明治維新を待たねばならなかった(原1892)。

そのような日本史上において、ヒツジをあつかった奈良時代の造形物は、現代の動物学的な視点からみても、また中・近世の造形物と比べても、ヒツジの特徴を正確に表現している。

そこでこの小論では、通史的視点と動物学的視点から、文献史料の羊、古代伝世資料のヒツジ、考古資料のヒツジ、図像・造形資料の羊の諸例を概観し、各時代のヒツジに関する容姿、あるいは認識をふまえた上で、奈良時代のヒツジの造形の歴史的意義を評価したい。

なお、動物学的視点の検討には、比較対象となるヤギについて把握しておくことも必要である。そこでまずは、ヒツジとヤギの動物学的特徴を整理することから検討を始めたい。

## II. 動物学的視点からみたヒツジとヤギ

動物学的視点からみたヒツジとヤギの特徴について(原1892、村上1907、宮地1972、加茂1973、正田1987、野澤1987、三浦1994、江口2003、角田2009、中西2014、田中2015)、特に立体的造形物や図像にも表現されやすい外形的な点に加えて、飼育術についても触れておきたい。

ヒツジ(偶蹄目ウシ科ヒツジ属。学名:Ovis)は、その角の断面形に3つの稜を伴うことがほとんどで、特定の種を除くと、耳を囲うように前方へ伸びる巻角となるものが多い。角の表面には、横環と呼称される横溝状の成長線がある。ただし家畜化・人工交配によって無角と

なった種もある。下顎に顎髯はない。上顎には門歯がなく、草を主な食物とする。尾を自由に動かすことはできず、綿羊種は毛を汚さないように生後間もなく尾を切断される。一方で、尾に脂肪を蓄える食用種は尾を切られずに肥大化させられる。性格は温順・臆病で、1頭の動きにつられて集団行動し、孤立させるとストレスを感じるとされる。飼育には、特に与える食物への配慮や、牧羊経験者の存在が必要とされる。そもそも日本の場合、気候風土がヒツジに適していないことが早くから指摘され、さらに20世紀代に入ってから、牧羊のために輸入されたヒツジ500頭のうち約半数が馬酔木による中毒死で死亡したこともあるなど(大道1936)、歴史的にみて国内のヒツジ飼育術は長らく低迷状態が続いていた。

家畜ヒツジの原種は、西アジア・中央アジア・ヨーロッパに生息する野生種のムフロン(図1・2。学名:Ovis musimon または Ovis orientalis)や、アルガリ(学名:Ovis ammon)、ウリアル(図3。学名:Ovis vignei)などとされる。これら野生種の性格は、家畜ヒツジに比べて活発で、成獣のオスの頭部には耳を囲うように前方へ伸びる立派な巻角が共通して認められる。角には横環が認められる。これら野生種の頬には胡髯が認められるが、下顎の先端に限定される顎髯は認められない<sup>3)</sup>。

ヤギ(偶蹄目ウシ科ヤギ属。学名:Capra)は、その角の断面形に2つの稜があり、角が直立あるいは、後ろや横に伸びることはあっても前方へ伸びることはない。食物には灌木の新芽や葉を好み、性格は活動的で高所を好む。このヤギの性格を利用してヒツジの群れをコントロールするために、ヒツジの群れには数頭のヤギを入れておく牧羊方法が現在も採用されている。すべての個体ではないものの、下顎には顎髯をもつ特徴があり、加えて肉髯が認められる種もある。粗食に耐え、出産時のリスクはヒツジよりも低いとされ、日本でもすでに江戸時代には孤島での繁殖例が知られている<sup>4)</sup>。

上記のヒツジ・ヤギの外見的特徴・食性は、歴史上の造形物・図像資料の表現や、文献史料中の記述を検討する際の、ヒツジ・ヤギの判別基準として有効な根拠とできる<sup>5)</sup>。

## III. 飛鳥・奈良時代の「羊」とヒツジの造形

先述したように日本史上における羊の初出は6世紀末

の推古朝だが、これに続く7世紀代には文献史料上の羊の記録がない。次に記録上に現れるのは8世紀に入ってからで、正倉院宝物である756年の『奉盧舎那佛種々藥帳』には、薬物としての「新羅羊脂」（ヒツジの脂 表1：756年）の存在が記される。これ以外には8世紀の文献史料上の記録が全く認められず、この時代の遺跡からはヒツジの骨の出土も認められない（西本・新美編2010）。したがって飛鳥・奈良時代には、羊・羊脂の入手は海外からの輸入に依存しており、日本国内でのヒツジの飼育や牧羊に成功することはなかったと考えていいだろう。

8世紀の図像例では、正倉院宝物の「羊木臈纈屏風」（表1：751～756年、図6：正倉院1994）があり、巻角をもつ成獣ヒツジ1頭が描かれ、画面下部には角のない幼獣ヒツジらしき1頭も認められる。この屏風の裂地には「天平勝寶三年十月」の墨書があることから、国産の屏風と位置づけられている（米田2013）。同じく正倉院宝物の中には唐の製品とされる「白石板」（図5：正倉院1994。白石鎮子とも呼称、翼状の飾りあり。）、国産品とされる「銀壺」（表1：767年、図7：正倉院1995）にも巻角のヒツジが認められる<sup>6)</sup>。また国産品の「十二支八卦背円鏡」（図8：正倉院1977・1995）には霊獣として図案化されたために翼をもち、顎髯を備えた巻角のヒツジが表現されている。さらに国産品とされる東大寺法華堂天蓋光心鏡の飛天十二支円鏡（図9：東大寺2013）にも、大きくはないが巻角のあるヒツジの姿が認められる。これらの図案化された成獣ヒツジの巻角は、基本的に耳を取り囲むように前へのびる形態であることが共通する。特に、中国唐での製作とされる「白石板」は、オスのヒツジが半肉彫りされ、巻角にある横環までも忠実に表現されている。これらは先述したムフロンなどのヒツジの原種の姿を彷彿させる造形である。

これらを参照すれば、奈良時代の日本では動物学的に正しいヒツジの造形・図像（様：ためし。浜田1970）を唐などから入手し、理解したうえで、国産品にもその姿が反映されていたことが窺える。また、現生種として存在しない「顎髯のあるヒツジ」像が日本国内で制作される背景については、註3で触れたように、中国大陸産の製品にも同様の造形物が存在することに着目すると、中国大陸の造形物・図像を忠実に取り入れた結果、日本

国内でも同様なヒツジ像の制作が可能となったと考えられる。

次に、動物学的な視点から、これら8世紀頃のヒツジの巻角に注目しておきたい。同じ巻角のヒツジ像の例を中国大陸・朝鮮半島に求めると、10世紀以前のヒツジ像にも共通して認められる<sup>7)</sup>。その諸例から窺えるのは、古代東アジアのヒツジ像、特に成獣のオスの像は、共通して巻角をもっていたということである。したがって、8世紀頃の東アジアでのヒツジの品種改良の進捗状況は、角のないオスを普及させるまでには至らなかった、あるいは少なくともオスのヒツジを象徴する姿には巻角が必要不可欠であったと考えられる。

以上のように考えると、推古朝～奈良時代に日本へ渡来したとされる実物の「羊」やその造形の姿も、現在のヒツジの原種や、中国などの家畜ヒツジの一部の種（サクテン羊・灘羊・小尾寒羊など。図4：角田2009）のように、巻角のある姿だった可能性が高い<sup>8)</sup>。

最後に、飛鳥・奈良時代の「山羊」にもふれておきたい。山羊（歌麻之之）の記載は『日本書紀』「皇極二年十月戊午」条、「天武十四年九月壬戌」条<sup>9)</sup>にある。この山羊は、「カマシシ」と読まれ、これは『日本書紀』のみに認められる表記と読みの組み合わせである。この動物は現在のニホンカモシカに該当するとされ<sup>10)</sup>、『日本書紀』編纂当時の奈良時代に限定できる「山羊」の語の使用方法与される（坂本1989）<sup>11)</sup>。そして同時に、この時代には、動物としてのヤギの存在が当時の知識者層にまだ知られていなかった可能性が高いと推測できる。

#### IV. 考古資料のヒツジ

近世以前の国内の考古資料には、骨などのヒツジの遺体の出土が確認されていない（西本・新美編2010）。したがってここでの検討対象となるのは、ヒツジの姿をかたどった考古資料だが、その例は極めて少ない。

##### a. 弥生時代の線刻画

ヒツジの図像の可能性が指摘されている最も古い例として、鳥取県青谷上寺地遺跡から出土した木製琴（弥生時代中期）に描かれた線刻画がある（図10・11：鳥取県2002・深澤2006・松井2006）。ここには4本足の動物が5頭描かれ、そのうち彫り直しのない2頭の頭部には巻角を表現したと考えられる円弧状の線刻がある。

この線刻を詳細に観察すると、2本の線刻で輪郭が表現されていること、ヒツジの巻角と同様に、その先端が前方へ向かって尖る様子を表現していることが理解できる。しかもこの線刻表現方法は、彫り直しされていない2頭に共通して認められる。魏志倭人伝（註2参照）には、3世紀頃の日本での羊の不在が記録されているものの、やはりここに線刻された動物は、その頭部の線刻表現方法や動物学的な視点から判断して、ヒツジの可能性が高いと考えられる。またこの表現方法から推測できるのは、実物のヒツジに関する何らかの情報が、少数ながらも当時の日本海側の人々にもあったということである。その直接のモデルとなったのは二次元の図像なのか（深澤2006）、実物のヒツジなのかは即断できない。しかし、甲骨文には巻角の特徴が取り入れられた「羊」の文字（白川2004。正面からみた巻角をもつヒツジの形）が存在することを考慮に入れば、この線刻画は側面からみた巻角のあるヒツジの姿を的確に表現していると考えて良いだろう。

#### b. 奈良時代の須恵質製品

奈良時代にはヒツジの頭部をかたどった装飾のある須恵質の製品が存在し、その用途は硯と見なされている。いわゆる羊形硯である。出土地は愛知県三河国府跡・愛知県正木町遺跡・岐阜県尾崎遺跡・三重県齋宮跡・滋賀県関津遺跡・京都府樋ノ口遺跡・奈良県平城京跡・岡山県ハガ遺跡の合計8遺跡、9地点での報告がある<sup>12)</sup>。

ここでは頭部の遺存状況が良好で、明らかにヒツジと考えられる巻角をもつ次の4点に注目したい。まず頬髯の表現に着目すると、A類・B類の2種に大別できる。A類は奈良県平城京左京四条四坊九坪（図12）と愛知県三河国府跡（図15・16）の2例である。B類は奈良県平城京右京八条一坊十三坪（図13）と三重県齋宮跡（図14）の2例である。A類の共通点は、頬髯が立体的に表現されたうえで、毛並みを表現する複数の線刻も加えられている。これに対してB類の共通点は、頬髯を立体的に表現せず、後方へ向かって跳ねるような毛彫りふうの短い線刻を複数加えることで表現している。またA類・B類の双方に共通する点は、①耳を囲むように前へのびる巻角であること、②巻角表面の横環を線刻で表現すること、③頬髯を表現すること、④胸の毛を長い線刻で表現すること、⑤角の生え際の頭頂部がこぶ状の高

まりであること、⑥突出する丸い目は頭部前面にあり、いわゆる竹管紋が施紋されること、⑦胎土は精良緻密であること（焼成は硬質～良好、色調は灰色～灰白色とややばらつきがある）、の7項目である。

その一方でA類・B類に大別した枠を超える共通点も認められる。まず、胸毛の表現方法として、波状の線刻とすることが、奈良県平城京左京四条四坊九坪と三重県齋宮跡の2例に共通する。さらに、鼻筋を側面からみるとやや弓なりに弧を描くことが、奈良県平城京跡と愛知県三河国府跡の3例に共通する。

次に、上記の共通点を動物学的な視点からも検討しておきたい。まずA類・B類の共通点①～④は、ヒツジの原種であるムフロンなどの頭部の特徴に一致する。またA類・B類の枠を越えて共通する鼻筋の特徴は、ローマ鼻形（寒冷・乾燥地での生息に適応した鼻の形態。角田2009。）と呼称されるヒツジの鼻筋の形態的特徴と一致する。この鼻筋の特徴はヒツジの原種のみならず、現在の中国の家畜ヒツジ（図4）の形態とも一致する。さらにA類の共通点である頬髯の立体表現は、頬髯の豊富なウリアル（図3）の頬髯を人為的に切りそろえれば、現実的に再現可能な頬髯である。動物の毛を切りそろえる例は、中国唐代などの馬のたてがみにも知られ（陝西省ほか1987）、ヒツジもその対象となったのではなかろうか。

このように考えれば、ヒツジの頭部を象った製品が日本国内で製作されるためには、ヒツジの実物の観察が可能であったか、あるいは極めて正確なヒツジの姿の情報が入手できたはずである。しかし、共通点⑥に注目すると、草食獣であるヒツジの姿とは異なる。この原因は、製作者が入手できた情報量の限界を示すと評価でき、ヒツジの側面観を優先する情報が入手できたことに起因する可能性がある。これに符合して、奈良時代にはヒツジの飼育記録はなく、考古学的にはヒツジの骨の出土例も認められない。あるいは、当時の土馬に通有の施紋方法が単に採用されたのだろうか。

共通点⑦は、その生産地の候補の一つとして、猿投窯を中心とする東海地域の須恵器窯を考慮に含めるべきことを示唆する<sup>13)</sup>。

以上の点から、A類・B類の製作を担ったのはヒツジの実物を観察した人物自身ではなく、ヒツジを二次元化

した図像（おそらく側面図に近い図像）のみの情報源を参照した人物が東海地域などの須恵器窯において製作した可能性が高いと考えられる。したがって、第1候補として須恵器工人を挙げることができるだろう。また出土地が平城京・斎宮、そして国府などの官衙遺跡といった国家機関の所在地であることや、当時のヒツジが一般人の目に触れない極めて希少な動物であったことも考慮すれば、その製作・使用の契機は、地方の須恵器工人の個人的発案とは考えられない。むしろ国家主導のもとにヒツジの造形装飾のある製品の製作・使用が発案され、その製作指示とともに、完成形態の図像が須恵器工人のもとへ届けられたと考えるべきだろう。その結果、類似した製品が平城京や各地の官衙へ運ばれ、使用されたと考えられる。また、その図像の情報源となり得たのは、先述した正倉院宝物などの諸例があるように、国家中枢部の機関での所蔵品や図像の粉本を挙げることができる。

また、これらのヒツジの造形を伴う製品の製作に際して採用された図像は、A類・B類の存在から明らかのように、複数種の図像が存在したことも想定できる。ただし、一見してヒツジの頭部とは判断できないような例も出土していることから、必ずしも国家中枢部で用意された図像だけが参照されたのではないだろう。A類・B類以外の作例は、各地域単位でのヒツジ図像の図化や、場合によっては既製品を参照することで、目的とする造形の完成に至ったことの反映と考えられる。

## V. 平安時代の「羊」

### a. 平安時代に継続飼育された羊の有無

まずは『延喜式』に着目したい。巻23の民部下「交易雑物」条（表1：967年）には武蔵国からの貢納品として、諸本によって「羊皮二枚」または「半皮二枚」とも記されるようだが、「牛皮二枚」と記される例が多い。正しくは「牛皮」だったと考えて良いだろう。同じく巻32の大膳式上「釋奠祭料」条（表1：967年）には中国大陸の祭祀例に倣って「羊脯十三斤八兩」が記されるものの、「鹿脯」で代用するとの注記がある。この注記こそが当時の日本での実態を記していると考えられ、ヒツジ肉を常備することは困難だった状況が窺える（天野1996）。

さらに『日本三代実録』貞観12年（表1：870年）には、戦闘時の装備の一つとして「羊革甲」「牛革甲」を記す。

これに対して『延喜式』巻23の民部下「年料別貢雑物」条には、牛革の貢納が記されているものの、羊革の貢納は認められない。したがって「牛革甲」は日本製であってもよからうが、「羊革甲」を日本製とは想定しがたい。

上記の文献史料から判断すると、平安時代の日本でのヒツジの肉・革を目的とした恒常的飼育（黒川1888・加茂1976・梶島2002）を想定することには無理であろう。同時代の考古資料中に、ヒツジの骨が確認されていないことも符合する。そもそも国内産のヒツジでその皮が入手できるのなら、同時にその肉も入手できるはずだから、先述の「羊脯」を「鹿脯」で代用せずともよいはずである。

以上の検討から、平安時代にはヒツジを恒常的に飼育しておらず、霊獣や貢物として日本へ連れて来られることはあっても、その増殖に成功することはなかったと考えて良い。海外からの一時的な羊の渡来の機会にのみ、一部の上級階層だけがその羊を目にする状態が続いていたのである。そしてこの状態が原因となり、日本でのヒツジは中国のように犠牲獣（岡村2005）として定着せず、長らく珍獣・霊獣であり続けることができた。

### b. 平安時代の羊の容姿・食性・飼育術

11世紀の『水左記』・12世紀の『玉葉』（表1：1077年・1185年）には羊の容姿に関する記述が認められる。顎髯があり、巻角でないこと、尾が動くという特徴から、ここに記された「羊」とは、ヤギのことと考えていいだろう（天野1996、梶島2002）。この考えを進めれば、平安時代の記録上の「羊」のすべてを、短絡的にヒツジとは断定できないことになり、早くに同様の指摘がある（加藤1800年代）。また10世紀の『本朝世紀』・12世紀の『玉葉』（表1：939年・1185年）の食物の記述に着目すると、仮にその動物をヒツジであるとして、草を主食とするヒツジに対して木の枝葉のような草以外の食物を与えているのであれば、それは不適切な飼料であり、飼育術の未熟さを裏付けていることになる。飛鳥・奈良時代以来の牧羊が日本国内に定着しなかった一因が、上記のような飼育術、さらにはヒツジ飼育経験者の不在にあった可能性を指摘できる。あるいは木の枝葉を好むという食性から素直に考えれば、やはりこの動物はヒツジではなくヤギと考えるべきであろう。角合わせをするという習性も、この動物をヤギと考えるうえで矛盾

はない。

### c. 平安時代の動物学的素養と羊

次に文献史料中の山羊と羚羊・零羊（註14）参照）に言及しつつ、ヒツジについて検討したい。

『日本紀略』「弘仁十一年五月甲辰」条（表1：820年）は、「白羊」と併記される「山羊」の初出記録である。海外からやってきたこの山羊は、先述した『日本書紀』中の「山羊」（カマシシ）、すなわち日本固有種であるニホンカモシカであるはずはなく、現代のヤギ、またはヒツジの一種と推定されている（坂本1989）。ここで筆者が注目したいのは、『日本紀略』の記事中では「白羊」と「山羊」がはっきりと識別されている点である。つまりこの2種の動物は、素直に「白いヒツジ」と「ヤギ」という2種と理解するのが妥当だろう。（カモシカには羚羊羊の字をあてる。）この考えは、平安時代の『和名類從抄』には「羊」を掲載し、それに「比豆之」（ヒツジ）の読み仮名が記されていることとも齟齬をきたさない。

すなわち9世紀の弘仁年間当時は、奈良時代と同様にヒツジの容姿を理解でき、それ故にヤギ・カモシカとの識別が可能であったと考えられる。またこの記事では「山羊」の文字表記が『日本書紀』以来、改めて復活されたものの、その意味する動物はかつての「カマシシ」（ニホンカモシカ）ではなく、新たにヤギを意味する文字として用いられたと考えられる。その背景には、ヤギがヒツジよりも荒涼とした岩場での生息に耐え、高所を好むという習性が理解され、中国での使用にならって「山羊」という語が再登場したと推定しておきたい<sup>14)</sup>。

ところが、その後の10世紀前半に成立した『和名類從抄』（京都大1977）には「山羊」が解説されていない。また同じく10世紀前半の『本草和名』（表1：918年）には「羊乳」・「羊蘇」を掲載し、「零羊角」の解説には「山羊」・「大羊」・「野羊」と記すものの、「山羊」の解説はないのである。どうやら10世紀に入って、日本では「山羊」の存在が記録上から一時的に失われつつあったことが窺える。

これら10世紀前半の文献史料から窺えるのは、この当時の知識者層といえども、ヒツジとヤギを動物学的に識別できるような機会に恵まれなかったということであり、もはや弘仁年間を含む9世紀代と同様な動物学的素養が普及していたとは考え難い状況が窺える。

ここで注目したいのは、先述した『水左記』・『玉葉』・『本朝世紀』天慶2年（939年）に記された「羊」の記載である。それらの「羊」とは、先述のようにヤギのことを指していると考えられ、10世紀代にはヒツジとヤギの混同が明らかで、ヤギのことを「羊」とであると認識していた可能性が高い。『和名類從抄』・『本草和名』から窺える10世紀前半の知識者層の動物学的素養の実情をも考慮に含めれば、この時代になってヒツジとヤギに対する識別と理解に混乱が生じていたとしても何ら不思議ではなく、むしろ当然の結果であったと考えていざらう。

ヒツジ・ヤギに関する10世紀代の動物学的素養の混乱にさらに拍車をかけたのが、10世紀末～12世紀後半まで続く「羊」の返還措置と、疱瘡と思われる流行病の発生（表1：977年・1077年・1171年）である。病気の発生源と目されたのは「羊」だったが、実際にはヒツジだけでなく、ヤギであった可能性も高いことが上記の検討結果から指摘できる。また羊の返還措置と流行病によって、社会的地位が高く、記録の担い手でもあった知識者層さえもが実物のヒツジ・ヤギを目にする機会を奪われてしまったことは間違いない。もちろん、ヒツジの継続的飼育が国内で成功しなかったうえに、遣唐使の廃止（894年）によって海外文化の積極的摂取が減退したこと、そして9世紀中葉～後半の長期にわたってヒツジの渡来記事が認められないこと（表1）などの諸条件が重なってしまったことも少なからず影響している。

以上のように、文献史料から窺える10～12世紀の歴史的経緯を概観すれば、ヒツジ・ヤギに関する当時の動物学的な理解度は明らかに低迷しており、それ故に両者を混同していた。それにもかかわらず、社会的身分の高い知識者層は比喩表現上の知識（後述）として、珍獣・霊獣である「羊」の存在を知っていたために、2本の角をもつ渡来動物に対して、なかば盲目的に「羊」と認定するが多かったと考えられる。

### d. 平安時代の図像中の羊とヤギ

上記の文献史料から窺えたヒツジ・ヤギの混同に対して、ここでは9～12世紀頃に描かれた羊像の具体例を年代順に概観したい<sup>15)</sup>。

平安時代前期（9世紀）の西大寺蔵『十二天像』のうちの火天像は、白い臥羊の背に坐す姿が描かれている（図

17：浜田 1973)。この臥羊の頭部は一見してヒツジと即断できる容貌ではない。おまけに写実的ではない描画技法が採用され、巻角の向きが実際のヒツジとは逆の下向きとなるなど異形の角が描かれている。

平安時代後期（11世紀）の京都国立博物館蔵『釈迦金棺出現図』（中野 1975、京都博 1992、泉 1993）では、釈迦の右手側の天部像の中に羊冠を被るとされる像が描かれている（図 18）。描かれた角は巻角を意識しているようだが、実物の巻角とは異なって、角の表面に毛が生えたように表現され、左右の角の描き分け方に写実性が認められない。同時代頃の法隆寺蔵『星曼荼羅』（図 19：中野 1975、法隆寺 1986）には、十二宮のうちの「羊宮」が描かれるが、後方へのびる角、顎髯はヤギのそれと同じで、現実のヒツジにはない規則的な斑紋がほぼ全身に描かれる。

平安時代末期の東寺観智院蔵『胎蔵曼荼羅略記』下巻には、「羊宮」の「白色羊」（図 20：1133年書写）として後方へのびる 2本の角と長い顎髯の明瞭な頭部が描かれ、明らかにヤギの特徴が認められる。同時代の仁和寺蔵『薬師十二神将図』のうちの「未像」（図 21：1168年書写）は、神将が坐す羊を描く。その羊は上記の法隆寺蔵『星曼荼羅』に描かれた姿に類似する。さらに万徳寺蔵や高山山西南院蔵の『覚禅鈔』五大虚空蔵法に収める「三十六禽図」（1184年奥書：中野 1969、藤澤編 1996）には、「羊 十六」として、後方にのびる角、顎髯をもつ姿が描かれる。いずれもヤギと考えるべき姿である。

12世紀末の奈良国立博物館蔵『胎蔵図像』巻下の「羊宮」（図 23：1194年書写）<sup>16)</sup>には、頬から顎の髯や、実際のヒツジとは異なる後方へのびるゼンマイ状となった異形の巻角をもつ姿に描かれている。

12世紀代のその他の密教図像など<sup>17)</sup>に描かれた「羊宮」・「羊神」像を参照しても、頭部には後方へのびる角があり、頬から顎には髯の認められる例が多い。やはりヤギと考えるべき姿である。また新薬師寺蔵『仏涅槃図』の下辺に描かれた羊とされる像（図 22：中野 1975、有賀 1977）も同様で、特に上記の法隆寺例と類似する。

以上の図像諸例から窺えるように、平安時代の羊の容姿には、動物としてのヒツジを正確に描く例は認められない。むしろ 9世紀頃には、描画上の問題もある異形の

角を持つ姿が登場し、12世紀には、後方へのびる角や顎髯が特徴的なヤギの姿が多くを占めるまでになっていたことが認められる。つまり 12世紀には、ヒツジの姿が「ヤギ化」して記録されるという状況が、日本国内で定着し始めたということである。

この異形の角をもつヒツジ像に注目すると、それらの例は、9～12世紀の知識者層の間で、正しいヒツジの姿が混乱して伝承、理解されていたという当時の実情を如実に示す根拠として評価できる。この点は 10～12世紀の文献史料から窺えた当時の実情に一致する。

最後に、平安時代末期の高山寺蔵『鳥獣人物戯画』乙巻（図 24：小松 1987・辻 1991）にもふれておきたい。この巻には、後方へのびる 2本の角、頬から顎にかけての髯が明瞭な動物 6頭が描かれている。詞書きがないものの、現代の動物学的な視点から判断して、この 6頭はヤギであることは明白である。しかし同時に、この動物の角と顎髯の特徴は、上記の「羊」像の中に多くの類例を求めることができる。したがってこの『鳥獣人物戯画』に描かれた 6頭のヤギは、当時は、「羊」として描かれた蓋然性が大いにあることを指摘できる。

#### e. 平安時代の文献史料中の比喩表現としての羊

動物としてのヒツジではなく、比喩的文章表現として用いられる「羊」の語が平安時代に登場する。その淵源・手本には、前漢代の楊雄撰『法言』吾子巻第 2 に虎と対比して中身のものを「羊質」と記す例がある（鈴木編 1972）。また北涼代の曇無讖訳『涅槃経』「迦葉菩薩品 第十二之六」など<sup>18)</sup>では、「如因趣市歩歩近死。如牽牛羊詣於屠所」と漢訳されたことにある。この經典では、時の流れは止まらず、いずれは死にゆく運命を、温順であるがゆえに屠殺される牛・羊にたとえて記述している。さらに三国時代の魏の曹操による五言二四句「苦寒行」をはじめとして、唐代にも曲がりくねった通行の難所を、実際の地名やヒツジの腸になぞらえて比喩的に「羊腸」と呼称することが広まった（松浦 1999・鄭 2005）。このような比喩表現は平安時代の文章表現に取り入れられ、『日本霊異記』・『日本三代実録』・『小右記』・『源氏物語』・『扶桑集』・『本朝文粹』<sup>19)</sup>などの説話集・正史・日記・小説・漢詩集に広く用いられている。これらの使用実例では、比喩的な意味合いで羊の語が用いられているに過ぎず、その書中では羊の生態・容姿は重視

されず、併記されていない。

つまり平安時代には、中国に倣って文章中での比喩表現として羊の語を用いることが重要視され始めたのである。このような使用例の変化の背景には、仏典からの引用があるように、極楽浄土や末法の世を強く意識した、当時の浄土信仰・末法思想の隆盛や、中国文学を理解した知識者層の存在が少なからず関係していると考えられる。

その一方で、実際のヒツジの姿が調度品などの意匠に取り入れられた様子は認められないようで、奈良時代ほどの流行は認められない時代へと平安時代の間に変化していったことが窺える。

したがって平安時代には、先述したように実物のヒツジとは疎遠になりながらも、文字上の比喩表現としては接点を持ち続けた「羊」が身近にあったのである。それゆえに、10世紀以降の知識者層は、2本角の珍獣を目にすれば、すぐさま「羊」を連想しやすいように条件づけられた文化的環境にあったことを指摘できる。

## VI. 中世の「羊」

### a. 中世の図像中の羊とヤギ

13・14世紀の図像として、例えば次の例がある。醍醐寺蔵『薬師十二神将図』の「未像」(1227年書写)<sup>20)</sup>には、未像が立つ一角獣(あるいは斑紋のある体毛・後方へのびる角・顎髯をもつ)に描かれる例、後方へのびる角と顎髯のある獣標を頭上にもつ未神将像の例(図25)、その獣頭人身の未像の例が描かれる。高野山眞別處圓通寺蔵『図像抄』「北斗法」の北斗曼荼羅(1310年書写)<sup>21)</sup>では、十二宮の「未宮」として、後方へのびる角・顎髯・斑紋のある体毛の姿が描かれる。東寺観智院蔵の『二十八部衆并十二神将図』の「未像」(図26:1359年書写)<sup>22)</sup>も、頭上の獣標には後方へのびる2本の角と顎髯が認められる。これらはいずれもそのモデルとなった動物がヤギであることは明白である。

さらに中世の仏涅槃図には参照すべき例が多い(中野1975・1976、中野1988、九州博2015など)。注目したいのは、いずれの例も図の下辺に描かれた動物群であり、この中に巻角をもつ動物は認められないことである。そしてこの動物群の中には、後方へのびる2本の角や、それに加えて顎髯まで描かれたヤギの存在を確認できる例が多いことである。

ここで注意したいのは、釈迦の涅槃に際して参集した動物名について、『大般涅槃経』<sup>23)</sup>に記されていることである。すなわち龍・金翅鳥・象・師子・鳧・鴈・鴛鴦・孔雀・乾闥婆鳥・迦蘭陀鳥・鳩鵒・鸚鵡・俱翅羅鳥・婆嚩羅鳥・迦陵頻伽鳥・耆婆者婆鳥・水牛・牛・羊・蜂・毒蛇・蟻螂・蝮・蝎が挙げられている。ここに「羊」は明記されるが、「山羊」は含まれない。また鎌倉時代に明恵上人が著した『四座講式』のうちの「涅槃講式」(建保3年正月29日)にも、釈迦の涅槃に際して参集した動物が記されている。その内容はほぼ上記の『大般涅槃経』に一致し、「羊」は明記されるものの、やはり「山羊」は認められない<sup>24)</sup>。

以上の経典や文献史料の内容を考慮に入れると、仏涅槃図の動物として「羊」が描かれることはあっても、「山羊」が描かれたことは想定すべきではないだろう。

ここで改めて中世の仏涅槃図を概観すると、その中に認められるのは、平安時代後期の法隆寺蔵『星曼荼羅』の「羊宮」などと一致する姿の動物で、ヤギの姿である。

したがって中世において各種の仏画を描くに際しては、ヤギの姿の動物を「羊」として認識する状況が完全に定着していたと考えられる。

### b. 中世の十二神将「未像」の彫刻

この時期に、最も顕著に羊の造形が認められるのは、十二神将像の未像である。その頭部には標識となる羊の頭部が付けられた例が知られている(中野1998、川瀬2009)。ところが、その頭部の造形を動物学的な視点から観察すると、角は後方へ真っ直ぐにのびている。また顎髯がある例も散見できる。これらの特徴から判断して、そのモデルとなった動物はヒツジではない。多くの場合は、先述した図像の例と同じく、ヤギがその彫刻のモデルとなったと考えるべきである。

これら未像の彫刻例からみても、当時のヒツジに対する動物学的な理解は誤ったものであったと指摘でき、中世の未像には、ヒツジとしての正しい巻角をもつ像がほとんど造像されなかったと考えて良いだろう。これはもちろん、二次元の様々な図像が彫刻の下図(様:ためし)としても使用・流布されたために、結果的に先述した図像と同様な意匠の彫刻例が誕生したと言える。

### c. 中世の文献史料中の羊

中世には『猪隈関白記』(『大日本古記録 猪隈関白記

一』「建久八年七月五日」条：1197年）・『後愚昧記』（『大日本古記録 後愚昧記一』「応安元年七月廿三日」条：1368年）などに比喩表現としての「羊」を用いる例が認められる。これら中世の諸例をみると、先述した平安時代と同様の使用法が少なくとも14世紀まで継続していることが窺える。

これに対して実物の「羊」の存在記事は2件（表1：1416年・1423年）と少ない。この時期の文献史料上の「羊」とは、先述した図像資料を考慮に入れば、それはヒツジではなくヤギのことと考えられる。しかし史料上には、その生態・容姿に関する記述がなく、図像資料以上の検討材料は導き出せないようである。

## VII. 近世以降の「羊」

慶長の頃に羊が輸入された史料（表1：1596～1612年。小泉1688）があるものの、その実態は不詳である。

その後は、中国から本草学・博物学などの情報が輸入され、『本草綱目』（図27・28・41・42：李撰1596）、『三才図会』（図29：王編1609）、『圖繪宗彝』（図32・33：揚撰1702）、『毛詩名物圖説』（図35：徐撰1782）、『古今圖書集成』（図43：陳編1884）が日本国内でも刊行され、その解説書が刊行されることもあった。さらに日本人研究者によって『本朝食鑑』（表1：1692年：人見1692頃）、『訓蒙図彙』（図30・31：中村編1666）、『長崎見聞録』（図34：廣川1797）、『和漢三才図会』（図36・37：寺島編1824）、『古今要覧稿』（図38～40：屋代編1842）、『大和本草』（表1：1709年：貝原1709）、『和訓栞』（表1：1777年：谷川1903）が刊行された。しかしこれらを概観すると、大半の書において、ヒツジ・ヤギの容姿・生息地に関して混同や誤解が認められ、その挿図にも同じ状況が認められる。円山応拳もヤギを羊と誤認していたのである（表1：1771年）。その中で、巻角のある「綿羊」や、無角の「胡羊」は正しいヒツジの姿に描かれている点が中世の状況とは異なり、この点でそれまでの誤りを修正できている。

江戸後期になるとヒツジを正しく理解する動きが博物学・本草学以外の分野でも認められ、蝦夷地への赴任経験のある武士の島田元旦が『黄初平図』の中に巻角のヒツジを描くに至った（表1：19世紀前半頃。鳥取県

1969、新明2011、安村2014）。さらに葛飾北斎は、ヤギを「野牛」として区別することもできたようである（図44：葛飾1878）。

明治時代には、江戸末期に着手された羊毛の試験的生産が、明治政府による軍事関連の政策として本格的に稼働した（加藤1800年代、原1892、田中2015）。ここに至って、ようやく日本でも動物学的に正しいヒツジ・ヤギの姿を学べる機会が学校教育の場でも設けられるようになったのである。（図45：島1876）。

## VIII. まとめ

奈良時代の正史『続日本紀』には動物の「羊」の記述はない。しかし遣唐使に代表される国際交流によって、少なくともヒツジの容姿に関する情報が奈良時代の日本へ届けられていたことは、正倉院宝物のみならず、近畿地方とその周辺各地から出土するヒツジ形製品の出土によっても裏付けられている。

これらの奈良時代の造形物が示すのは、その情報源や製作に至る経緯だけではない。そもそも中国大陸では、贈答品として、羊や酒を提供することが一般的であった（李1974、魏1974、笑1969）。この点に注目すれば、中国大陸での贈答品としてのヒツジの文化的側面を、日本にも取り入れようとした結果、本稿で取り上げたヒツジ形の須恵質製品が中央政府の主導のもとで誕生したと考えられる。このように考えれば、このヒツジ形製品は、中央政府などからの下賜品という評価も可能である。平安時代に入り、遅くとも10世紀以降にはヒツジの容姿が現実の姿ではなくなってしまったことや、その後は近世までヤギをヒツジであると認識し続けていた状況をみると、奈良時代の遺品は日本の歴史上において、動物学的に正しくヒツジを理解していたという点でも、特に輝きを放つ存在であると評価できる。また、本稿A類・B類以外の、ヒツジとは思えぬ製品は、このような文化波及が各地方においても浸透・拡散していたことを考古学的に証明する資料と考えられる。

しかし残念ながら、日本の気候風土はヒツジの飼育に最適とは言い難く、本格的な飼育に成功するのは近代以降となった。これが大きな原因となって、日本では中国大陸とは異なり、ヒツジが犠牲獣として位置づけられることはなかったと考えられる。それどころか平安時代に

は死を招く流行病の原因として羊が恐れられ、星曼荼羅や十二神将の中に登場する霊獣として祀られることもあった。この時代には、ヒツジであったはずの動物が実際にはヤギにとって代わられていたことが各種の図像からも確認できたが、この状態は、鎌倉・室町・江戸時代にも継承されており、「未」・「羊」は仏教文化や文字表現の中の珍獣・霊獣として、存在意義を長らく保ち続けたと評価できる。

このような「羊」の存在意義が大きく方向転換するのは明治時代からであり、羊毛の国内生産開始に端を発して、動物学的に正しいヒツジの認識・教育によって、珍獣・霊獣としての「羊」から、家畜としてのヒツジへと変貌したのである。

#### 謝辞

本稿の執筆、写真掲載に際して、下記の機関・寺院・個人のお世話になり、ご教示を賜りました。ご芳名を挙げ、お礼申し上げます。(50音順・敬称略)

京都市学校歴史博物館、宮内庁正倉院事務所、齋宮歴史博物館、東大寺、鳥取県教育文化財団、豊川市教育委員会、奈良文化財研究所、法隆寺

榎村寛之、大野正法、大野哲二、金井香代子、岸田早苗、神野恵、菅沼真衣、永井洋之、森光彦、山内章子

#### 註

- 1) 本文・表では、カタカナ表記の「ヒツジ」は動物学的にヒツジであることを意味し、漢字表記の「羊」はそれぞれの出典中の表記に基づくことを示す。「山羊」・「ヤギ」などの表記方法も同様である。
- 2) 3世紀頃の日本での羊の不在を記す記録として、いわゆる魏志倭人伝の「其地無牛馬虎豹羊鵲」が知られている。石原道博編訳 1985『新訂魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝 中国正史日本伝(1)』岩波文庫(青)33-401-1 岩波書店、pp.46・80・109。
- 3) 中国三国時代の青磁羊(中国国家博物館蔵、燭台:江蘇省南京市清涼山呉墓出土。馮先銘・鄧白・弓場紀知編 1996『中国美術全集1 工芸編陶磁(I)』京都書院、pp.146・263)は、顎髯がなく、卷角の明瞭なヒツジではあるが、胴の側面には翼が線刻される。一方で中国西晋の青磁羊(奈良県蔵、シルクロード学編 2004)は、顎髯

があり、卷角の明瞭なヒツジ像である。顎髯のあるヒツジの姿は、すでに絶滅してしまった当時のヒツジをかたどったのか(ヒツジとヤギの間には、極めて低い確率で混血種が誕生することが知られている。その特徴を表現したか)、あるいは翼のあるヒツジに代表されるように想像上の霊獣化された姿をかたどったのか、それともヒツジとヤギの特徴を混同したのか、明らかでない。

- 4) 『伊豆海島風土記』(樋口 1974)によると、江戸時代の享保年間には「羊」の自然繁殖が記録されており、3頭が献上されたこともあるという。ただし、ここに記された「羊」とは、正しくはヤギのことである(原 1892、加藤 1800)。現在も小笠原諸島・八丈島などには野生化したヤギの存在が知られているとともに、ヤギほど再野生化しやすい家畜はいないとも指摘される(野澤 1987)。このような海島における野生化ヤギの出現は、航海時の非常食料とされたヤギが、その島への人間の陸に伴って解き放たれたことによる(加藤 1800、野澤 1987)。
- 5) ヒツジ・ヤギのほかに、いわゆる「半羊」と呼称される種(たとえばバーバリーシープ。学名: *Ammotragus lervia*)も偶蹄目ウシ科に含まれ、一見するとその容姿はヤギやヒツジの原種にも似る。この種が明治時代以前に日本へもたらされたか否かは不明だが、現在のその生息域は北アフリカであり、中国大陸・朝鮮半島では生存が認められない。したがって今回の検討には、この半羊を含める必要はないと考える。
- 6) この銀壺には、ヤギ、あるいはカモシカかレイヨウと思われる動物も描かれ、頭部には後方へのびる2本の角が認められる。ただしその顎に注目すると、顎髯は認められないため、この点を評価すれば、その動物はヤギの可能性は低い。少なくともヒツジに関する動物学的な知識のみならず、それ以外の動物に関する知識も、この銀壺の製作に活かされていたと考えるべきである。
- 7) 中国・朝鮮半島での卷角のヒツジの作例として、例えば以下のものがある。中国の例=西晋の青磁羊(3~6世紀:シルクロード学編 2004)、西魏の敦煌莫高窟第285窟の南壁五百強盜婦仏因縁図(6世紀:大沼・樊 2001)、唐代墓出土十二支俑の未像(奈良権考研博 2010)など。朝鮮半島の石製十二支像の未像(木下 2009)を参照すると、ある程度の年代比定が可能な例として、伝元聖王陵(在位 785~798年)、伝興徳王陵(在位 826~836年)、

伝金庾信墓（8世紀後半）、九政洞方形墳（8世紀後半～9世紀前半）、開心寺跡五層石塔（1010年建立）を挙げることができる。これらの未像の角に注目して概観すると、8世紀代では立派な巻角が表現されているが、9世紀代には巻角が矮小化する傾向にある。そして11世紀には、もはや巻角をもった未像が製作されなくなったようであり、開心寺跡の未像では、牛のような頭部と角が表現されている。したがって朝鮮半島においても、時代が下ると巻角をもった未像（ヒツジ像）が消滅するという方向性は、本文で後述する平安時代の日本での状況と軌を一にしている。ところで「寒林牧羊圖」（元代：作者不詳。鈴木敬 1988『中國繪畫史 中之二（元）新装版』吉川弘文館、pp.213、図143）や「二胡羊圖」（元代：趙子昂作。前記の鈴木 1988、pp.214、図144）には、無角のヒツジが描かれ、『圖繪宗彝』の「胡羊」（図32：楊 1702）にも無角のヒツジが描かれている。したがって中国大陸では元代以降には無角のヒツジの飼育が増えていたことが窺える。注目したいのは、上記の「二胡羊圖」には、ヒツジとヤギが1頭ずつ描かれているにもかかわらず、その画名や讚には「山羊」の文字がなく、元代においては、ヤギも「羊」と呼称される場合があったことを窺わせる点である。その一方で明代では、1607年に刊行された『圖繪宗彝』の「山羊」（図33：揚 1702）には、顎髯・後方へのびる2本の角が明瞭なヤギが正しく描かれている。ところが『三才図會』の「羊」（図29：王編 1609）には、顎髯はないものの、後方へのびる2本の角をもつヤギの姿を収録し、「山羊」の項目が欠落するなど、中国大陸での動物の理解に混乱が認められる。もう1例として1725年完成、1884年刊行の『古今圖書集成』に収録された「羊圖」（図43：陳夢雷編・蔣廷錫增訂 1884）には、後方へのびる2本の角と顎髯が明瞭なヤギの姿が描かれる。これらの中国の博物学・絵画資料からみれば、ヒツジとヤギを同一視、あるいは混同することの嚆矢は遅くとも元代に認められ、近世にはその状況が確実となっている。このような歴史的背景のもとで、現在の中国では、未年のマスコットや動物絵として、ヒツジのみならずヤギも慣例的に多用される傾向にある。平安時代以降の日本でのヒツジ・ヤギの混同の一因には、このような中国での理解・呼称から影響を受けたことも想定できる。この想定に関連して想起されるのは、毛筆の原材料となる揚子

江下流域産の白ヤギの毛が、現在の日本でも慣例として「羊毛」と呼称されていることである。この「羊毛」という用語は、ヤギを羊と誤認していたかつての日本の歴史を現代に継承しているのではなかろうか。

- 8) 『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』によると711年には存在したと考えられる法隆寺五重塔の塔本塑像のうち、北面9号像（法隆寺 1996）にも注目したい。残念ながらこの像は、頭部に被る獣冠が完存しておらず、その左側面には先端が欠損する心材が露出している。本来はその左右両側にあつた心材と考えられる。この心材を詳細に観察すると、湾曲しつつも下方へ、そして前方へのびる形状を見てとれる。この心材の形態は、ヒツジの巻角の様子に類似している。すでにこの像に対しては、「羊冠」を被る姿として制作された可能性が指摘されているが（中野 1975）、筆者もこの指摘に従い、巻角のあるヒツジをモデルとして8世紀初頭頃に制作されたと考えたい。
- 9) 黒板勝美編 1971『新訂増補國史大系 日本書紀 後篇』吉川弘文館、pp.199・379。
- 10) 坂本太郎ほか校注 1965『日本古典文学大系 68 日本書紀下』岩波書店、pp.249の註27。
- 11) このような表記方法が発案されたのは、奈良時代の『日本書紀』編纂者達が、動物学的に正しいヒツジ像を理解できる文化的素養を身につけていたためと考えられる。そのために、ヒツジと対比させる意味で、高山地帯に生息し、容姿が類似するニホンカモシカを、「山羊」と漢字表記するに至ったのではなかろうか。
- 12) 愛知県三河国府跡（白鳥遺跡）：林弘之 2002「白鳥遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報 17』愛知県教育委員会、林弘之 2010「白鳥遺跡」『愛知県史資料編 4 考古 4』愛知県。愛知県正木町遺跡：名古屋市教育委員会編 2001『埋蔵文化財調査報告書 38』名古屋市文化財調査報告 51。三重県齋宮跡：齋宮歴史博物館編 1992『国史跡齋宮跡 平成3年度発掘調査概報』。岐阜県尾崎遺跡：岐阜県文化財保護センター編 1993『尾崎遺跡』。滋賀県関津遺跡：滋賀県教育委員会編 2010『関津遺跡Ⅲ』。京都府樋ノ口遺跡：京都府埋蔵文化財調査研究センター編 1992『京都府遺跡調査概報』第48冊。奈良県平城京左京四条四坊九坪：奈良国立文化財研究所編 1983『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』。平城京右京八条一坊十三坪：奈良国立文化財研究所編 1989『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調

査報告』。岡山県ハガ遺跡：岡山市教育委員会編 2004『ハガ遺跡－備前国府関連遺跡の発掘調査報告－』。いずれの遺跡においても体部の完存例は出土しておらず、これらの製品の実際の用途の確定には至っていない。しかし出土地は、首都をはじめ、国家機関が関わる国府や官衙遺跡、それに準じる政治権力が関与する遺跡であることが指摘されている。

- 13) 奈良文化財研究所の神野恵氏も、これらの羊形製品の生産地の一つとして、猿投窯周辺の窯を想定しておられるとのこと教示を頂いた。愛知県正木町遺跡出土例も猿投窯周辺での製作と推定されている（註 12）の名古屋市教委編 2001）。
- 14) 「山羊」の語は、中国では遅くとも唐代には孫思邈撰の『千金要方』（巻 2、孫 1970）において「羊」との区別がなされていたことが指摘されている（加納 2007）。その一方で、奈良時代に「カマシシ」と呼称されたニホンカモシカに対しては、平安時代の『延喜式』・『本草和名』では「羚羊」・「零羊」などと表記されている。これも中国での使用例（加納 2007）にならったものである。平安時代に至って、ニホンカモシカに対する文字表記も変更され、新たな表記方法が定着し始めたようである。これらの表記方法の変化は、弘仁年間の「山羊」の渡来と決して無関係ではなからう。おそらくこの頃の「山羊」の渡来が契機となり、それまでの日本独自の表記方法が変更されたのではなからうか。
- 15) 仏教経典・仏教図像類の検索には、SAT 大正新修大蔵経テキストデータベース 2012 版 (<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT>)、および大正新修大蔵経図像部データベース：SAT 大正蔵図像 DB (<https://dzkings.l.u-tokyo.ac.jp/SATi/images.php>) を利用し、大正新修大蔵経刊行會編『大正新修大蔵経』を参照した。
- 16) 『大正新修大蔵経図像部』第 2 巻 pp.284、および奈良国立博物館「画像データベース」参照。
- 17) 12 世紀の奥書・書写が判明する羊像には次の例などがある。教王護国寺蔵『胎藏曼荼羅略記 下巻』の「羊宮・白色羊」（『大正新修大蔵経図像部』第 2 巻 pp.971）、教王護国寺蔵『火羅図』の「武曲星」には十二宮の「羊宮」（『大正新修大蔵経図像部』第 7 巻 pp.702）、『別尊雜記』巻第四十八「妙見曼荼羅」の「羊宮」（『大正新修大蔵経図像部』第 3 巻 pp.532）、大通寺蔵『曼荼羅集』「太元曼荼羅」の十二神将「未

神」（『大正新修大蔵経図像部』第 4 巻 pp.275）。また勸修寺蔵『覚禅鈔』（原本は平安時代後期ながら、後世の写本には追加画像も含むとされる）の「葉師法」に掲載する十二神将像の獸頭人身未像（『大正新修大蔵経図像部』第 4 巻 pp.419）には、異形の卷角と鬚髯をもった姿が描かれる。

- 18) 『大正新修大蔵経』第 12 巻寶續部下・涅槃部全「大般涅槃経卷第三十八 迦葉菩薩品第十二之六」（北涼曇無讖訳）pp.589c など。
- 19) 遠藤嘉基・春日和男校注 1967『日本古典文学大系 70 日本靈異記』岩波書店、pp.305（巻下序：羊僧）。黒板勝美編 1971『新訂増補國史大系日本三代実録 後篇』吉川弘文館、pp.424（「元慶二年三月二九日」条：犬羊狂心）。東京大学史料編纂所 1959『大日本古記録 小右記 一』岩波書店、pp.178（「永祚元年五月一日」条：羊腸難堪）。山岸徳平校注 1963『日本古典文学大系 18 源氏物語 五』岩波書店、pp.272（「浮舟」：羊の歩みよりも、程なき心地す）。塙保己一編 1980『群書類従第 8 輯 装束部文章部』「扶桑集」巻 7 収録の「近以拙詩寄王十二適見惟十四和之之什因以解答 野相公」續群書類従完成会、pp.565。大曾根章介ほか 1992『新日本古典文学大系 27 本朝文粹』岩波書店、pp.265～266（巻八「秋日於河原院同賦山晴秋望多」：還恥羊仮虎之文）。
- 20) 『大正新修大蔵経図像部』第 7 巻 pp.411・419・421・422・429・441・453。
- 21) 『大正新修大蔵経図像部』第 3 巻図像 No.134。
- 22) 『大正新修大蔵経図像部』第 7 巻 pp.514。
- 23) 『大正新修大蔵経』第 12 巻、pp.369 c（大般涅槃経卷第 1 寿命品第 1、北涼：曇無讖訳）、田上 1996。
- 24) 『大正新修大蔵経』第 84 巻、pp.898c・pp.899a。

引用・参考文献（50 音順）

- 天野秀昭 1996「齋宮跡出土の羊形硯」『瑞垣』174 号 神宮司廳、pp.45～49
- 有賀祥隆 1977「仏涅槃図」『大和古寺大観 第 4 巻 新葉師寺・白毫寺・円照寺』岩波書店、pp.58～60
- 泉武夫 1993「釈迦金棺出現図の構成と図像」『研究と座談会 釈迦金棺出現図』第 23 冊 仏教美術研究上野記念財団助成研究会、pp.11～15
- 磯野直秀 2007「明治前動物渡来年表」『慶應義塾大学日吉紀

- 要自然科学』No.41 慶応義塾大学日吉紀要刊行委員会、pp.35～66
- 井手誠之輔 2001『日本の宋元仏画』日本の美術 418 至文堂
- 梅原末治 1943「支那唐代銀器の三四に就て」『美術研究』第130号 美術研究所、pp.127～135
- 江口保暢 2003『動物と人間の歴史』築地書館、pp.23～72
- 王圻編・王思義続集 1609「卷之鳥獸三」『三才圖會』卷26（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 大阪市立美術館編 2009『道教の美術』読売新聞大阪本社・大阪市立美術館、pp.155～179、pp.215～217、pp.223～235
- 大沼淳・樊錦詩監修 2001『敦煌莫高窟2 第285窟』文化出版局、図版79・89
- 大道弘道編 1936『緬羊の話 飼育の手引と実例』朝日新聞社、pp.31
- 岡村秀典 2005『中国古代王権と祭祀』学生社、pp.151～203
- 小野蘭山著・小野職孝録 1803～1806「羊」・「山羊」『本草綱目啓蒙』卷之四十六（井口望之蘇仲訂 1992『本草綱目啓蒙4』東洋文庫 552、平凡社、pp.50・51・75）
- 貝原篤信 1709「羊」・「野牛」『大和本草』卷16 永田調兵衛（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 梶島孝雄 2002『資料日本動物史』八坂書房、pp.596～608
- 葛飾北斎 1878『北斎漫画』14編 片野東四郎（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 加藤懋 1800年代（発行年不明だが、明治初期頃とされる）『本邦放羊事跡考』、pp.1～9（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 加納喜光 2007『動物の漢字語源辞典』東京堂出版、pp.30～33
- 加茂儀一 1973『家畜文化史』法政大学出版局、pp.825～901
- 加茂儀一 1976『日本畜産史 食肉・乳酪篇』法政大学出版局、pp.174
- 川瀬由照 2009『十二支一時と方位の意匠』日本の美術 No.518 ぎょうせい
- 川添裕 2009「舶来動物と見世物」『人と動物の日本史2 歴史の中の動物たち』吉川弘文館、pp.127～160
- 木下亘（研究代表者）2009『平成18年度～平成20年度科学研究費補助金基盤研究B 三次元計測技術を用いた新羅王陵石造彫刻の総合的比較研究』課題番号18300310 研究成果報告書 奈良県立橿原考古学研究所
- 九州国立博物館編 2015『トピック展示 大涅槃図展』九州国立博物館
- 京都国立博物館編 1992『国宝釈迦金棺出現図』京都国立博物館、pp.263
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編 1977『諸本集成倭名類從抄 本文編』臨川書店、pp.219
- 魏収撰 1974「列傳第12 張袞」『魏書 第2冊 傳』中華書局、pp.616
- 黒川真頼 1888『増補訂正工藝史料』、pp.113（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 小泉友賢著 1688「龜井武蔵守殿商賈廻船異國渡海之事」『因幡民談記』卷之六（1914年、伯耆叢書発行所、pp.10～12：国立国会図書館デジタルコレクション）
- 小松茂美編 1987『日本の絵巻6 鳥獣人物戯画』中央公論社、pp.76・77
- 坂本太郎 1989「カモシカと山羊」『坂本太郎著作集 第十一巻 歴史と人物』吉川弘文館、pp.284～287
- 鳥次郎 1876『博物教授法 文部省新刊小学懸図巻之2 動物』墨香居（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 笑笑生（小野忍・千田九一訳）1969『金瓶梅 下』世界古典文学大系 35 平凡社、pp.182（原書は明代）
- 正倉院事務所編 1977『正倉院の金工』日本経済新聞社、pp.33・43・44・95・97・149・150・154
- 正倉院事務所編 1994『正倉院寶物1 北倉I』毎日新聞社、pp.38・112・166・230・267・272
- 正倉院事務所編 1995『正倉院寶物7 南倉I』毎日新聞社、pp.60・223・239・240
- 正田陽一監修 1987『世界家畜図鑑』講談社、pp.150～167
- 白川静 2004『新訂 字統』平凡社、pp.877
- シルクロード学術センター編 2004『奈良公園シルクロード 交流館展示図録』奈良県観光課、pp.31
- 新明英仁 2011『「アイヌ風俗画」の研究』中西出版、pp.175～177
- 徐鼎選 1782「羊」『毛詩名物圖説』卷2（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 鈴木かおる 2003「資料紹介 谷文晁筆「五星及廿八宿神形圖巻」」『栃木県立博物館研究紀要—人文—』20 栃木県立博物館、pp.47～73
- 鈴木喜一編・楊雄著 1972『中国古典新書 法言』明德出版社、pp.8・28～38

- 陝西省文物事業管理局ほか監修 1987『金龍・金馬と動物国宝展』大阪 21 世紀協会、pp.69
- 孫思邈 1970『備急千金要方』何家出版社、pp.21
- 田上太秀 1996『ブツダ臨終の説法 完訳大般涅槃経 1』大蔵出版株式会社、pp.31～35・57・58（本書 pp.242 に列挙された動物の中には「山羊」が記される。しかし原典とされる『大正新修大蔵経』第 12 巻の pp.403b～403c によれば、正しくは「羊」である。）
- 武田和昭 1995『星曼荼羅の研究』法蔵館、pp.187～200
- 田中智夫編 2015『シリーズ家畜の科学 5 ヒツジの科学』朝倉書店、pp.30～41・73～85・161
- 田中芳男 1893「羊の話」『東京學志會院雑誌』第 15 編之 8 東京學志會院、pp.380～403
- 谷川士清 1903『和訓栞』成美堂（初版は 1830 年）
- 陳夢雷編・蔣廷錫増訂 1884『古今圖書集成』禽蟲 卷 19「禽蟲典第 111 卷羊部彙考一之二」鉛本）上海圖書集成鉛版印書局（1725 年完成）
- 辻惟雄 1991『絵巻 鳥獣人物戯画と嗚呼絵』日本の美術 300 至文堂、pp.66・67
- 角田健司 2009「ヒツジ—アジア在来羊の系統—」『アジアの在来家畜』（財）名古屋大学出版会、pp.253～277
- 鄭高詠 2005『中国の十二支動物誌』白帝社、pp.230～257
- 寺島良安編 1824「羊」・「山羊」『和漢三才図会』卷 37・38 国会図書館デジタルコレクション
- 東大寺ミュージアム編 2013『奈良時代の東大寺』東大寺、pp.92
- 鳥取県 1969『鳥取藩史 第一巻 世家 藩志列伝』鳥取県立鳥取図書館、pp.401～402
- 鳥取県埋蔵文化財センター編 2002『青谷上寺地遺跡 4』鳥取県教育文化財団、pp.343・344・図版 73
- 中西良孝編 2014『シリーズ家畜の化学 3 ヤギの科学』朝倉書店、pp.1～10・27・76～92
- 中野玄三 1969「覚禅抄の未公刊図像」『佛教藝術』70 号 毎日新聞社、pp.140～149
- 中野玄三 1975・1976「涅槃図の動物画」（上・下）『佛教藝術』104・106 号 毎日新聞社、pp.65～91、38～57
- 中野玄三 1984「日本の動物表現」『研究と座談会 宗教美術における動植物表現』第 11 冊 仏教美術研究上野記念財団助成研究会、pp.19～21
- 中野玄三 1988『涅槃図』日本の美術 268 至文堂
- 中野照男 1998『十二神将像』日本の美術 381 至文堂
- 中村楊斎編 1666「羊」・「綿羊」『訓蒙図彙』卷 12（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編 2010『大唐皇帝陵』pp.140
- 奈良国立文化財研究所編 1983『平城京左京四條四坊九坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所
- 奈良国立文化財研究所編 1989『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所
- 西本豊弘・新美倫子編 2010『事典 人と動物の考古学』吉川弘文館、pp.144
- 野澤謙 1987「山羊」『人間がつくった動物たち』東京書籍、pp.73～100
- 野尻抱影 1971『星と東方美術』恒星社厚生閣、pp.133～144
- 浜田隆 1970『日本の美術 No.55 図像』至文堂、pp.26～29
- 浜田隆 1973「十二天像」『六大寺大観 第 14 卷 西大寺 全』岩波書店、pp.79～85
- 林温 1997『妙見菩薩と星曼荼羅』日本の美術 377 至文堂
- 原熙 1892『実用教育農業全書 第 8 編 養畜篇』博文館、pp.130～161（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 東平介 1998『十二支で語る日本の歴史新考』、pp.182～197
- 樋口隆康 1986「正倉院銀壺 附狩獵文について」『シルクロード考古学第 3 卷敦煌から日本へ』法蔵館、pp.284～297（初出は 1947 年）
- 樋口秀雄校訂 1974「大島」『伊豆海島風土記』緑地社（作者不詳、原本は天明 2 年成立と推定される）
- 人見必大著 1692 頃「羊」『本朝食鑑』卷之十一（島田勇雄訳注 1981『本朝食鑑 5』東洋文庫 395、平凡社、pp.248～253
- 廣川獬 1797 自序『長崎見聞録』江戸時代後期刊行：寛政 9 年、（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 深澤芳樹 2006「鹿と羊」『大阪府立弥生文化博物館図録 33 弥生画帖』大阪府立弥生文化博物館
- 深根輔仁 918( 頃)『本草和名』（正宗敦夫編・校訂 1977『日本古典全集 本草和名』下巻第 15 卷 現代思潮社）
- 藤澤令夫編 1996『図像蒐成Ⅳ 覚禅鈔（抄）3 万徳寺蔵』仏教美術研究上野記念財団助成研究会、pp.45
- 法隆寺昭和資財帳編集委員会編 1986『法隆寺の至宝 第 6 巻 絵画』小学館、巻頭カラー pp.16
- 法隆寺昭和資財帳編集委員会編 1996『法隆寺の至宝 第 3 巻 金銅像・塑像・乾漆像・石像』小学館、pp.77

- 毎日新聞社至宝委員会事務局編 1991 『皇室の至宝 2 御物 絵画Ⅱ』毎日新聞社、写真 48・pp.225
- 松井潔 2006 「くらしの風景 描く」『鳥取県の考古学 2』鳥取県埋蔵文化財センター、pp.28～31
- 松浦友久編 1999 『漢詩の事典』大修館書店、pp.372・373
- 三浦慎悟 1994 「ヤギの仲間たち」『朝日百科 動物たちの地球 9 哺乳類Ⅱ』朝日新聞社、pp.253
- 源順 931-983「羊」『和名類從抄』卷 28(元和元年『倭名類從抄』、国立国会図書館デジタルコレクション)
- 宮地伝三郎 1972 『宮地伝三郎動物記 1 十二支動物誌』筑摩書房、pp.81～83
- 村上要信 1907 『山羊飼方』村上要信、pp.75～76(国立国会図書館デジタルコレクション)
- 屋代弘賢編 1842 「さいのこま」・「綿羊」・「むくひつじ」『古今要覧稿』卷第 530・532 禽獸部(1982 覆刻 原書房、pp.638～656、国立国会図書館デジタルコレクション：古今要覧稿 56、禽獸部 41)
- 矢代幸雄 1946 「五星二十八宿神形図巻」『美術研究』139 座右寶刊行會、pp. 1～18
- 安村敏信 2014 『江戸の十二支どうぶつえん』東京美術、pp.76
- 山川武 1977 『日本美術絵画全集第 22 卷 応挙・呉春』集英社、作品 13・pp.129
- 楊爾曾撰・蔡汝佐畫 1702 『図繪宗彝』卷六(元禄 15 年版、西川寧・長澤規矩也編 1976 『和刻本書畫集成 第五輯』汲古書院、pp.227・230)
- 吉澤悟 2017 「正倉院南倉の銀壺について」『正倉院紀要』第 39 号 宮内庁正倉院事務所、pp.1～26
- 米田雄介 2013 「『国家珍宝帳』に見える屏風の成立について」『正倉院紀要』第 35 号 宮内庁正倉院事務所、pp.33～45
- 李延寿撰 1974 「列伝第 9 張袞」『北史 第 3 冊 傳』中華書局、pp.795
- 李時珍撰 1596、「羊」・「山羊」『本草綱目』(寛永 14 年版「獸部」卷之 50 国立国会図書館デジタルコレクション)
- 李時珍撰 江戸時代刊行「羊」・「山羊」『本草綱目図』卷 48・51(国立国会図書館デジタルコレクション)

表1 日本の「羊」の関連年表

年代	記載内容 or 作品名・描画・造形内容	対象動物	備考 or 描画・造形の特徴	出典：編纂年 or 原本記録年 / 参照文献
3世紀頃	其地無牛馬虎豹羊鵠。	羊	・羊の不在が記される。	魏志倭人伝:3世紀 / 『新訂魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝 中国正史日本伝 (1)』岩波文庫
599年(推古7)7月	秋七月。百濟貢駱駝一疋。驢一疋。羊二頭。白雉一隻。	羊	・日本史上の最古の羊渡来記録。	聖徳太子傳暦:10世紀頃 / 『続群書類従 第八輯上 伝部』
599年(推古7)9月	秋九月癸亥朔。百濟貢駱駝一疋。驢一疋。羊二頭。白雉一隻。	羊		日本書紀:720年 / 『新訂増補國史大系 日本書紀 後篇』
8世紀	法隆寺五重塔塑像「従者像北・9」= 獸冠は角をもつか?	ヒツジ?	・露出する銅芯は巻角を表現した可能性あり。	法隆寺昭和資財帳編集委員会 1996『法隆寺の至宝 第3巻 金銅像・塑像・乾漆像・石像』小学館
751-756年	正倉院宝物「羊木鬘羅屏風」= 巻角ヒツジ1頭・子ヒツジ1頭を描く。墨書「天平勝寶三年十月」あり。図6。	ヒツジ	・成獣の巻角はヒツジの特徴に一致。その角に横環の表現あり、鬚ヒゲなし。 ・墨書が調などの銘識なら国内産とされる。 ・『国家珍宝帳』記載品とされる。	正倉院編 1994・米田雄介 2013『『国家珍宝帳』に見える屏風の成立について』『正倉院紀要』第35号
767年	正倉院宝物「銀壺」= 狩獵文の中に、耳を囲む巻角のヒツジの疾駆する姿あり。刻銘「天平神護三年二月四日」あり。図7。	ヒツジ	・頭部の特徴はヒツジに一致。 ・国内産とされる。	正倉院編 1995 梅原 1943・樋口 1986・吉澤 2017
8世紀	正倉院宝物「十二支八卦背円鏡」= 肩に翼があり、耳を囲む巻角のヒツジの疾駆する姿あり。図8。	ヒツジ	・頭部の特徴はヒツジに一致。 ・八卦文様の誤りや製作法から国内産とされる。	正倉院編 1977
8世紀か	正倉院宝物「白石板」の未像 = 耳を囲む巻角、角に横環のあるヒツジのオス。図5。	ヒツジ	・『国家珍宝帳』記載品とは確定できないが、中国唐での製作とされる。	正倉院編 1994
756年	正倉院宝物「奉盧舍那佛種々藥帳」= 「新羅羊脂」の記載あり。	羊	・薬物としての羊脂の存在例。	天平勝宝 8年 6月 21日 / 大日本古文书編年 4-186
8世紀頃	東大寺法華堂天蓋: 飛天十二支円鏡。図9。	ヒツジ	・ヒツジの巻角におおむね一致。	東大寺 2013
820年(弘仁11)5月	五月甲辰。新羅人李長行等進殺羴羊二。白羊四。山羊一。鷲二。	羊・山羊: 渡来	・「殺羴羊」はカモシカのこと。 ・坂本 1989は、「山羊」をヤギかヒツジの一種と推定。	日本紀略:12世紀後半頃 / 『新訂増補國史大系 日本紀略 第二(前篇下)』
870年(貞観12)3月	廿九日辛巳。…小野朝臣春風奏言。…小野朝臣石雄家羊革甲一領。牛革甲一領在陸奥國。…給羊革甲。以充警備。帰京之日。全以進官。…	羊	・甲にヒツジの革を使用か。	日本三代実録:901年 / 『新訂増補國史大系 日本三代實録 前篇』
903年(延喜3)10月	十月廿日。大唐人獻羊。白鷺。	羊: 渡来		日本紀略:12世紀後半頃 / 『新訂増補國史大系 日本紀略 第三(後篇)』
903年(延喜3)10月	十月廿日丁亥。唐人景球。羊及白鷺ヲ獻ル。	羊: 渡来		通俗國史:1911年 / 『通俗國史』国立国会図書館デジタルコレクション
903年(延喜3)11月	裡書 三年十一月廿日丙辰。大唐景球等獻羊一頭。白鷺五角。	羊: 渡来		扶桑略記:12世紀後半頃 / 『新訂増補國史大系 扶桑略記 帝王編年記』
918年(延喜18)頃	「羴羊角」… 山羊一名羴羊、一名大羊、一名野羊。「羊乳」「酪蘇」… 羊羴爲勝。羊羴爲劣。	山羊 羊?	・カモシカの角を羴羊角と呼称したとされる。 ・ヤギ・ヒツジを同類視したか? ・ヒツジの乳を国内で利用したか?	本草和名:918年頃 / 寛政8年版: 国立国会図書館デジタルコレクション
935年(承平5)9月	九月□日。大唐吳越州人蔣承勳来。獻羊數頭。	羊: 渡来		日本紀略:12世紀後半頃 / 『新訂増補國史大系 日本紀略 第三(後篇)』
931-938年(承平年間)	「羊」兼名苑云抵音低一名羴 音歴 和名比豆之羊也 羔音高 一名羴 音佇 羊子也	羊	・日本最古の「ヒツジ(比豆之)」呼称の記録。	和名類從抄: 承平年間 / 『諸本集成倭名類從抄 本文編』
938年(天慶1)7月	廿一日丙寅。…此日。大宰府貢上羊二頭。是大唐商人所獻也。	羊: 渡来		本朝世紀:12世紀後半 / 『新訂増補國史大系 本朝世紀』
939年(天慶2)6月	四日甲戌。政。又上卿奏賑給奏。爰上卿召飼蔵人所羊二頭。於軒廊柱繫。令左近陣官折集木枝葉令飼之。宛如牛食草。良久以角相競似牛。…	羊: 渡来 ヤギか?	・木の枝葉を好む特徴はヤギに一致する。 ・これがヒツジならば、与える食物は適切ではなく、飼育術の不熟さが推し量れる。	本朝世紀:12世紀後半 / 『新訂増補國史大系 本朝世紀』
967年(康保4)施行	「民部下交易雑物」武藏國… 履料牛皮二枚。…	牛 / 羊	・「牛」の文字は、関本・林本・京本・梵本によって「羊」または「半」とも釈文される。	延喜式:927年 / 『新訂増補國史大系 延喜式中篇』・虎尾俊哉編 2007『延喜式中』
967年(康保4)施行	「大膳上 釋奠祭料」… 羊脯十三斤八兩。代用鹿脯。	羊	・羊の代わりに鹿の干し肉での代用を記す。	延喜式:927年 / 『新訂増補國史大系 延喜式後篇』
996年(長徳2)7月	十九日丁亥。唐人獻鷲羊。	羊: 渡来		日本紀略:12世紀後半頃 / 『新訂増補國史大系 日本紀略 後篇』
997年(長徳3)9月	八日庚午。返給去年唐人所進鷲羊。	羊: 返還	・上記の渡来記事から1年2ヶ月後に返還。 ・その理由は明記されないが、病気が流行か?	日本紀略:12世紀後半頃 / 『新訂増補國史大系 日本紀略 後篇』
1077年(承保4)2月	廿八日己酉。引見大宋國商人所獻羊二頭。	羊: 渡来		扶桑略記:12世紀後半頃 / 『新訂増補國史大系 扶桑略記 帝王編年記』
1077年(承暦1)2月(実際は承保4年)	廿八日。引見大宋國商人所獻之羊三頭。	羊: 渡来	・上記の記事内容とはほぼ一致。	百鍊抄:13世紀後半 / 『新訂増補國史大系 百鍊抄』
1077年(承暦1)6月(実際は承保4年)	十八日 自殿被獻鷲羊於高倉殿、件羊牝牡子三羊、其毛白如白犬、各有胡髯、又有二角、豫如牛角、身體似鹿、其大々於犬、其聲如猿、動尾纒三四寸許、	ヤギ?	・「羊」の特徴を列挙。白毛、頬から顎のヒゲ、牛のような2本角、鹿のような体で大きさは犬に同じ。声はサルのように、動く尾は10cmほど。 ・ヒゲ・角・体長・尾の特徴は、ほぼヤギに一致。	水左記:1077年 / 『増補史料大成 水左記 永昌記』
1077年(承保4)8月	六日癸未。今上第一皇子敦文親王薨。年僅四歳。上自一人(三公)下至庶人。莫不患赤胞瘡矣。親王公卿五位已上逝去之者多焉。	—	・「赤胞瘡」の流行で死者多数。	扶桑略記:12世紀後半頃 / 『新訂増補國史大系 扶桑略記 帝王編年記』
1077年(承暦1)(実際は承保4年)	今年。上自后宮大臣。下至庶人。皆煩赤斑瘡。親王公卿已下逝去者多。權右中弁師賢一人免此難。敦賢敦文兩親王依胞瘡薨。	—	・「赤斑瘡」(疱瘡)の流行で死者多数。	百鍊抄:13世紀後半 / 『新訂増補國史大系 百鍊抄』
1077年(承保4)8月	今月。返遣羊二頭了。	羊: 返還	・上記の渡来記事の2ヶ月後に羊2頭を返還。	扶桑略記:12世紀後半頃 / 『新訂増補國史大系 扶桑略記 帝王編年記』
1077年(承保4)8月	8月の各条。筆者源俊房は「赤痢」を患い、加えて「胞瘡」による病死者名を多く記す。	羊	他の史料の同年同月の記事を参照すれば、流行病の原因が羊に求められる。	水左記:1077年 / 『増補史料大成 水左記 永昌記』
11世紀後半～末頃	「釈迦金棺出現図」= 羊とみられる獸冠を被る神持像	ヒツジ?	・耳を囲む巻角のようだが、左右2本の描き分けが不十分。角の表面が毛羽立つ様も不審。	11世紀後半～末頃 / 京都国立博物館 1992『国宝釈迦金棺出現図』
1171年(承安1)7月	廿六日。入道大相國進羊五頭。麝一頭於院。	羊: 渡来	・後醍醐天皇のもとへ羊などを献上。	百鍊抄:13世紀後半 / 『新訂増補國史大系 百鍊抄』
1171年(承安1)10月	近日。稱羊病。貴賤上下煩病患。羊三頭在仙洞。人傳。承暦之比有此事。件羊返却之。	羊: 返還	・上記の記事から3ヶ月目で「羊病」が流行し、羊を返還。	百鍊抄:13世紀後半 / 『新訂増補國史大系 百鍊抄』

年代	記載内容 or 作品名・描画・造形内容	対象動物	備考 or 描画・造形の特徴	出典：編纂年 or 原本記録年 / 参照文献
1185年(文治1)10月	八日、丁巳 天晴、和泉守行輔、進羊於大将、其毛白如葦毛、好食竹葉枇杷葉等云々、又食紙云々、其體太無興、	羊:渡来	・源頼朝のもとへ届けられた羊は葦毛のように白く、竹葉・枇杷葉・紙を食べた。	玉葉:1185年 / 『玉葉 第三』名著刊行会
平安時代後期	「星曼荼羅」=頭の後方へのびる角・白い顎ヒゲ・斑文のある体毛。図 19。	ヤギ?	・斑文のある体毛は想像上の表現。	平安時代後期 / 法隆寺昭和資財帳編集委員会 1986『法隆寺の至宝 第6巻 絵画』小学館
12世紀後半頃(平安時代後期)	「鳥獣人物戯画」(乙巻)=頭の後方へのびる角をもつヤギ6匹。図 24。	ヤギ?	・ただし「山羊」の明記なく、当時の認識は不明。下腹部に特徴的な乳の表現なし。 ・粉本をもとにしつつ、シカをモデルとして描いたとの説もあり。	12世紀後半頃 / 小松茂美編 1977『日本絵巻大成 6 鳥獣人物戯画』中央公論社
平安時代末~鎌倉時代初め頃	「仏涅槃図」=頭の後方へのびる角・顎・頬ヒゲ・斑文のある体毛。	ヤギ?	・斑文のある体毛は想像上の表現。	平安時代末~鎌倉時代初め頃 / 大和古寺大観編集委員会 1977『大和古寺大観 第4巻』岩波書店
1356-1375年(南北朝)	「仲商三日」…三者。書色紙者。可用夏毛。若唐羊羊毛虎毛也。…	ヤギ?	・現在の「羊毛筆」は、伝統的に揚子江下流域産のヤギの毛を使用。この時代も同様か。	異制庭訓往来:南北朝 / 『群書類従 第九輯』
1416年(応永23)5月	廿二日。晴。…三位爲御使參。仰自禁裏白羊一疋行豊二被預置。而行豊又三位二預置。引之歸參入見參。初而羊見之有興。	羊:飼育	・禁裏で飼われていた白羊が伏見宮へ連れてゆかれ、見物対象となる。	看聞日記:1416年 / 『続群書類従 補遺2 看聞日記上』
1423年(応永30)2月	廿二日。雨下。…仰聞。禁裏羊養給。而二宮御所望之間被進之處。則被打殺云々。…	羊:飼育	・後小松天皇第二皇子の小川宮が禁裏の羊を所望し、譲り受けてたちまち、打ち殺した。	看聞日記:1423年 / 『続群書類従 補遺2 看聞日記上』
1596-1612年(慶長の頃)	「龜井武藏守殿商賣廻船異國渡海之事」…又龜井殿は麴孔雀驢馬野牛。麴香の猫羊迄も舟に積み取寄せらる。驢馬と野牛は小山の池青嶋に放し置かれしが。光政公の御代寛永の頃迄生て居ける由なり。…	羊:渡来	・鹿野藩藩主の龜井茲矩は明との貿易によって、野牛・羊なども船に積み日本へ持ち帰った。 ・野牛は、羊とは別種なので、ヤギのことか。野牛は寛永年間まで生存し、羊のその後は不詳。	因幡民談記:1688年 / 『因幡民談記』巻2(1914年復刻:国立国会図書館デジタルコレクション)
1596年(原書は明:万曆24)(日本:1637年版)	「羊」挿絵=上方左右にのびる角、喉・胸・腹、背中→後ろ足の長毛を描く。顎ヒゲなし。図 27。 「頰曰」として、羊の種類は甚だ多いとし、大尾羊・胡羊・洮羊・封羊・地生羊などを記す。	ヒツジ?	・同書では、顎ヒゲのある「山羊」とは描き分けられ、 ・大尾羊・胡羊は現代中国で同呼称の種あり。	李撰 1596 本草綱目 / 『頭註國訳本草綱目』1637年 / 国立国会図書館デジタルコレクション
1596年(原書は明:万曆24)(日本:1673年版)	「山羊」挿絵=顎ヒゲあり。「野羊」「羶羊」とも記し、「羊之在原野者故名」という。図 28。	ヤギ	・生物学的特徴よりも生息地が命名の源とされる。	李撰 1596 本草綱目 / 『頭註國訳本草綱目』1637年 / 国立国会図書館デジタルコレクション
1596年(原書は明:万曆24)(日本:江戸時代)	「羊」挿絵=前へのびる巻角、太い尾、頬・顎の長毛、胸・腹・背の長毛あり。図 41。	ヒツジ?	・顎付近の長毛が比較的長いが、おおむねヒツジの特徴に一致。	李撰 江戸時代刊 本草綱目図 / 国会図書館デジタルコレクション
1596年(原書は明:万曆24)(日本:江戸時代)	「山羊」挿絵=前へのびる巻角、長い顎ヒゲ、太い尾あり。図 42。	ヒツジ or ヤギ?	・巻角と尾はヒツジの特徴、顎ヒゲはヤギの特徴。 ・ヒツジとヤギを混同。	李撰 江戸時代 本草綱目図 / 国立国会図書館デジタルコレクション
1607年(明:万曆35)(日本:1702年版)	「胡羊」挿絵=無角で耳が垂れ、丸みのある体のヒツジ。前足を折って乳を飲む子ヒツジを描く。図 32。	ヒツジ	・その姿は現代中国で飼育される無角の羊に類似。 ・尾が短いのは切断されたためか。	揚撰 1702 図繪宗彝 / 『和刻本書畫集成 第五輯』
1607年(明:万曆35)(日本:1702年版)	「山羊」挿絵=後方へのびる角、顎ヒゲのある白・黒・黒斑のヤギ 3匹を描く。図 33。	ヤギ	・その姿は仏涅槃図中の「羊」に類似。	揚撰 1702 図繪宗彝 / 『和刻本書畫集成 第五輯』
1666年(寛文6)	「羊」挿絵=後方へのびる角・顎ヒゲあり。図 30。	ヤギ	・角・顎ヒゲはヤギの特徴に一致。 ・ヒツジをヤギと混同。	中村編 1666 訓蒙図彙 / 国立国会図書館デジタルコレクション
1666年(寛文6)	「綿羊」挿絵=前方へのびる巻角、長い顎ヒゲ・頬の長毛あり。図 31。	ヒツジ?	・巻角はヒツジの特徴に一致するが、顎ヒゲは不審。	中村編 1666 訓蒙図彙 / 国立国会図書館デジタルコレクション
1692年頃(元禄5)	「羊」…喉下より胸に至りて鬚毛多く鼻昂し。牡は両角並び生じて、長さ七八寸、黄灰色にして、頗る水牛角に似たり。…	ヤギ	・ヒゲ・角の特徴は、ヤギに一致する。	人見 1692 本朝食鑑 / 東洋文庫 395『本朝食鑑 5』
1709年(宝永6)	「羊」…其種類多シ。本邦ノ人ハ不好食、故養之者稀ナリ。只處々海嶋放養…	ヤギ?	・生息地はヤギの特徴に一致。混同するか?	貝原 1709 大和本草 / 国立国会図書館デジタルコレクション
1709年(宝永6)	「野牛」…是羊之別種似羊而不同。其大比犬狗差小ナリ。其毛及足短シ。此與羊異、其角向于後。毛色有白者有黒者。其形與牛不相類。謂之野牛者訛稱。爾本岬不載之。其種自外國來歟。今本邦處々海嶋放養之甚繁殖。或曰山羊ナリ。本草ニノセタル山羊ハ別物也。	ヤギ	・後ろへ伸びる角、海島での繁殖はヤギの特徴に一致。 ・「羊」とは別種とし、本書に「山羊」の項目ないことから、これがヤギの可能性高い。	貝原 1709 大和本草 / 国立国会図書館デジタルコレクション
1782年(乾隆47)	「羊」挿絵=後方へのびる角が巻癖のある角、頬・顎に長毛、胸・腹・背に長毛、太い尾あり。図 35。	ヒツジ?	・角の巻きは弱いが、おおむねヒツジの特徴に一致。	徐撰 1782 毛詩名物圖説 / 国立国会図書館デジタルコレクション
1785年(天明5)	「羔羊之皮」挿絵=後方へのびる角、顎ヒゲあり。	ヤギ	・角・顎ヒゲはヤギの特徴に一致。 ・ヒツジをヤギと混同。	徐撰 1782 毛詩名物圖説 / 国立国会図書館デジタルコレクション
1777-1877年	「ひつじ」…今處々の海島に放ちかへとも食する事はなし。…野牛と稱する物は綿羊にて變種也。是も海島に繁殖せりという。…	ヤギ? ヒツジ?	・生息地はヤギの特徴に一致。 ・「野牛」はヒツジ(綿羊)のこととする。	谷川 1903 和訓栞:18-19世紀
1771-1800年頃(明和~寛政の頃)	円山応挙作「羊写生図」(個人蔵=後方へのびる角、顎ヒゲあり)。 同じく「黄初平図」(遠山記念館附属美術館蔵=後方へのびる角、下顎と頬に長毛あり)。 同じく「群獸図屏風」(宮内庁三の丸尚蔵館蔵=後方へのびる角、下頬・顎に長毛あり)。	ヤギ	・円山応挙は羊を描いたとされるが、角の特徴は明らかにヤギに一致。	山川 1977、毎日新聞 1991
1797年(寛政9)	「野牛」挿絵=前方へのびる巻角、頬ヒゲあり、短毛の長い尾あり。図 34。 ヒツジの類で漢名は不詳と記す。	?	・巻角はヒツジの特徴に一致するが、尾は不審。	廣川 1797 長崎聞見録 / 国立国会図書館デジタルコレクション
1803-1806年(初版)(享和3~文化3)	…本邦京師ニハ畜者ナシ。他州ニハ畜処モアリ。皆漢種ナリ。…形馬ニ比スレバ小サク、狗ニ比スレバ最大ナリ。多クハ淡褐色ナリ。…喉下ヨリ胸ニ至テ長毛アリ。喜テ紙ヲ食フ。此獸惡臭アリ。…一綿羊、今舶来アリ。ソノ毛極テ細クシテ長シ。…	ヤギ ヒツジ	・ヤギとヒツジを混同。 ・綿羊として再認識されたヒツジ。 ※左の書には「山羊」の項目もあるも、「詳ナラズ」とし、明和6年に京で見物となった一角獣のことを記す。	小野者 1803 本草綱目啓蒙 / 国立国会図書館デジタルコレクション
19世紀前半頃	島田元日作「黄初平図」(神戸市立博物館蔵)=前へのびる巻角の4頭、角のない1頭のヒツジを描く。顎にヒゲなく、体は丸みを帯び、尾は丸く短い。	ヒツジ	・ヒツジの特徴を明確に描く。	安村敏信 2014
明治時代初期	伊豆大島・九州の山野には山羊が生息。	ヤギ	・近代的視点からヒツジについて記述。	加藤 1800 本邦牧羊事跡考 / 国会図書館デジタルコレクション



図1 ヒツジの原種：ムフロン  
天王寺動物園（2014年に筆者撮影）



図5 正倉院宝物 白石板：未像（巻角に横環・ローマ形鼻・翼？）  
正倉院 1994、宮内庁正倉院事務所蔵・写真転載



図2 ムフロンの頭部（巻角に横環・頬髯・ローマ形鼻）  
天王寺動物園（2014年に筆者撮影）

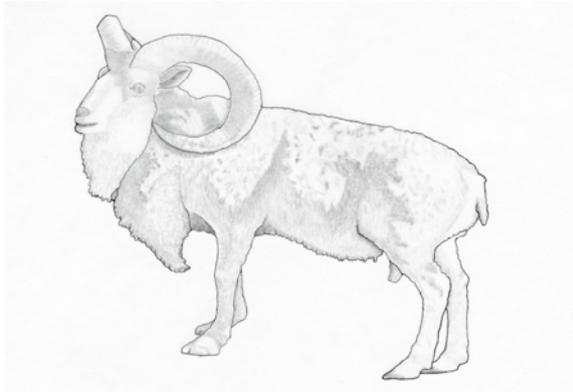


図3 ヒツジの原種：ウリアル（巻角・頬髯・胸毛）  
角田 2009 の図Ⅱ - 5 - 3 - 3 をトレース



図6 正倉院宝物 羊木臈繡屏風：羊像（巻角に横環・胸毛）  
正倉院 1994、宮内庁正倉院事務所蔵・写真転載

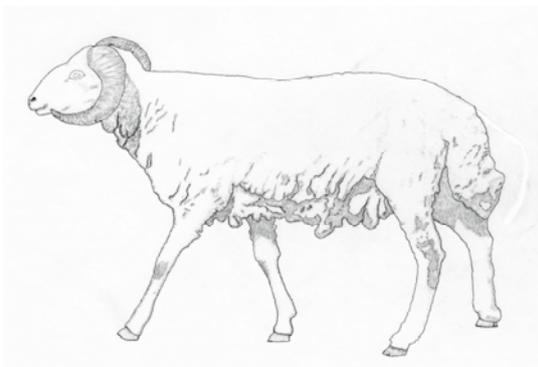


図4 中国の現生種の家畜ヒツジ：灘羊（巻角・ローマ形鼻）  
角田 2009 の図Ⅱ - 5 - 14 - 8 をトレース



図7 正倉院宝物 銀壺(甲)：羊像（巻角に横環・頬髯・胸毛）  
正倉院 1995、宮内庁正倉院事務所蔵・写真転載

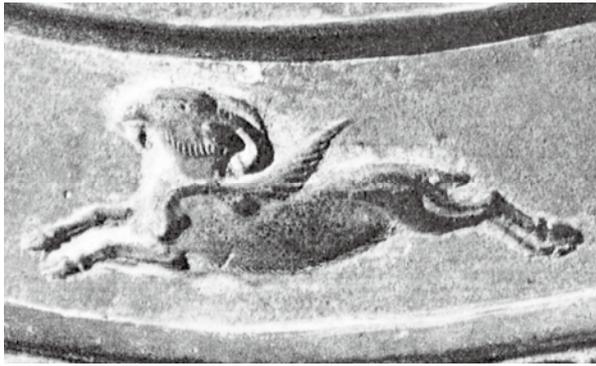


図8 正倉院宝物 十二支八卦背円鏡：未像  
 (巻角に横環・頬髯・顎髯・翼)  
 正倉院 1977、宮内庁正倉院事務所蔵・写真転載



図9 東大寺法華堂天蓋 飛天十二支円鏡：未像 (巻角)  
 8世紀頃 東大寺2013、東大寺蔵・写真転載



図10 鳥取県青谷上寺地遺跡：木製琴側板 弥生時代中期  
 鳥取県 2002、鳥取県教育文化財団・写真転載



図11 同上 右端の動物画を拡大 (頭部に巻角?)



図12 平城京左京四條四坊九坪 羊形硯 8世紀  
 (巻角に横環・立体的頬髯・ローマ形鼻・波状線刻の胸毛)  
 奈良文化財研究所蔵・写真提供



図13 平城京右京八条一坊十三坪 羊形硯 8世紀  
 (巻角に横環・線刻頬髯・ローマ形鼻)  
 奈良文化財研究所蔵・写真提供



図14 斎宮跡 羊形硯 8世紀頃  
 (巻角に横環・線刻頬髯・波状線刻の胸毛)  
 斎宮歴史博物館蔵・写真提供



図15 三河国府跡 羊形硯 8世紀  
(巻角に横環・立体的頬髯・ローマ形鼻)  
豊川市教育委員会蔵・写真提供



図19 星曼荼羅：羊宮 平安時代後期  
中野1975、法隆寺蔵・写真転載



図16 同上 (頭部正面) 豊川市教育委員会蔵・写真提供



図20 胎藏曼荼羅略記 下巻：羊宮の白色羊 1133年書写  
大藏經第2巻971頁の一部をトレース：東寺観智院蔵



図17 十二天像：火天像の臥羊 9世紀  
浜田1973の102頁の一部をトレース：西大寺蔵



図21 薬師十二神将図：未像 1168年書写  
大藏經圖像部第7巻388頁の一部をトレース：仁和寺蔵



図18 釈迦金棺出現図：獸冠の眷属 11世紀  
京都博編1992の263頁の一部をトレース：京都国立博物館蔵



図22 仏涅槃図：羊 平安時代末～鎌倉時代初め頃  
中野1975の図20の一部をトレース：新薬師寺蔵



図23 胎藏図像 卷下：羊宮 1194年書写  
奈良国立博物館画像データベースをトレース：奈良国立博物館蔵



図27 本草綱目 卷50：羊 1637年。明の原書は1596年  
李撰1596、1637年版：国立国会図書館デジタルコレクション



図24 鳥獣人物戯画 乙巻：ヤギ 平安時代末期  
小松1987の77頁の一部をトレース：高山寺蔵

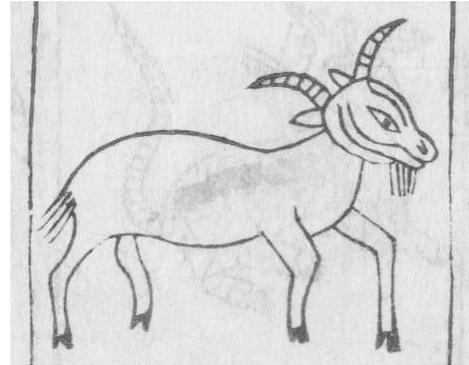


図28 本草綱目 卷51：山羊 1637年版。明の原書は1596年  
李撰1596、1637年版：国立国会図書館デジタルコレクション



図25 薬師十二神将図：未像 1227年書写  
大蔵経図像部第7巻429頁の一部をトレース：醍醐寺蔵



図29 三才図会 卷26：卷之鳥獸三：羊 明1609年  
王編1609、1609年版：国立国会図書館デジタルコレクション



図26 二十八部衆并十二神将図：未神 1359年書写  
大蔵経図像部第7巻514頁の一部をトレース：東寺観智院蔵



図30 訓蒙図彙 卷12：羊(やう・ひつじ・やんぎう) 1666年  
中村編1666、1666年版：国立国会図書館デジタルコレクション

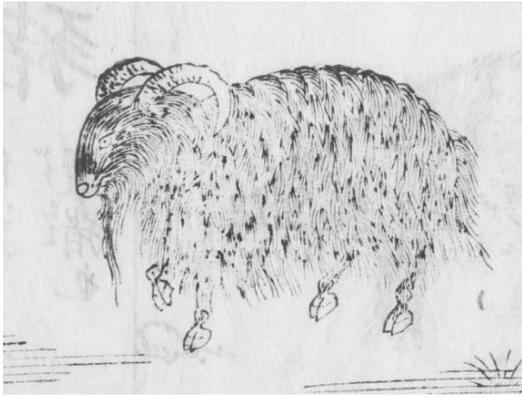


図31 訓蒙図彙 卷12：綿羊 1666年  
むくひつじ・夏羊・胡羊と同種とする  
中村編1666、1666年版：国立国会図書館デジタルコレクション



図35 毛詩名物圖説 卷2：羊 1782年  
徐撰1782、1808年版：国立国会図書館デジタルコレクション

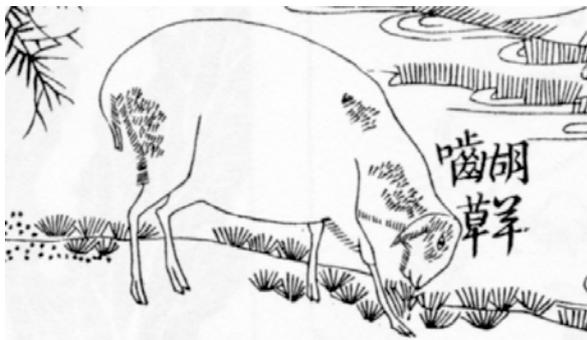


図32 図繪宗彝 卷6：胡羊 明の原書は1607年  
揚撰・蔡畫1702、1702年版



図36 和漢三才図会 卷37：羊 1824年  
『訓蒙図彙』の挿図に同じ  
寺島編1824、1824年版：国立国会図書館デジタルコレクション

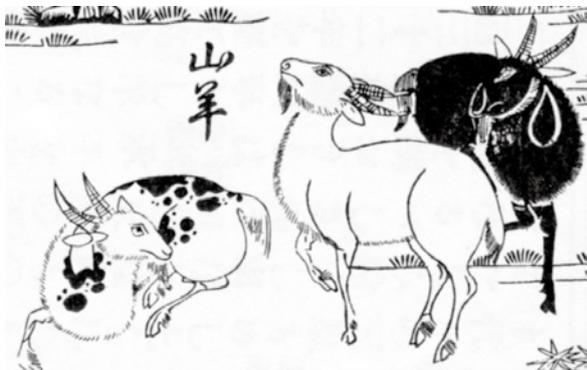


図33 図繪宗彝 卷6：山羊 明の原書は1607年  
揚撰・蔡畫1702、1702年版



図37 和漢三才図会 卷38：山羊 1824年  
寺島編1824、1824年版：国立国会図書館デジタルコレクション



図34 長崎見聞録：野牛 寛政9年自序（江戸後期）  
廣川1797自序、写本：国立国会図書館デジタルコレクション

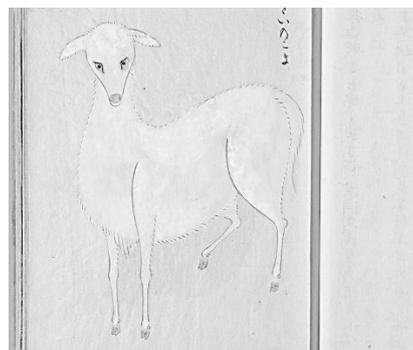


図38 古今要覧稿 卷第532：さいのこま（綿羊）1842年成立  
屋代編1842、写本：国立国会図書館デジタルコレクション

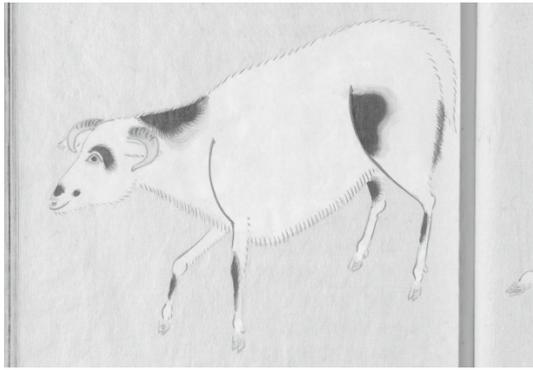


図39 古今要覧稿 卷第530：綿羊 1842年成立  
屋代編1842、国立国会図書館デジタルコレクション



図43 古今圖書集成 禽蟲典第111卷：羊 陳編1725年完成  
陳編1884年

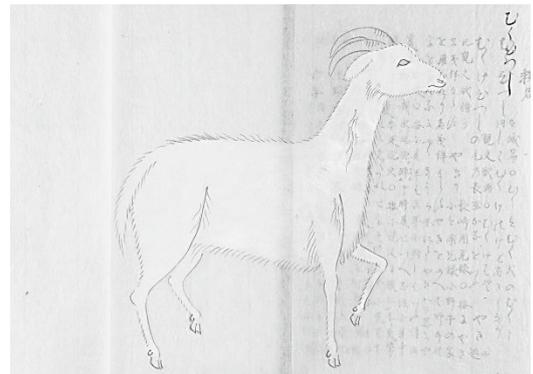


図40 古今要覧稿 卷第532：「むくひつじ」（やぎ） 1842年成立  
屋代編1842、国立国会図書館デジタルコレクション



図41 本草綱目図 卷48：羊 江戸時代  
『毛詩名物圖説』を踏襲  
李撰：江戸時代刊行、国立国会図書館デジタルコレクション



図44 北斎漫画 14編：野牛・綿羊・胡羊 19世紀前半作  
葛飾1878年、国立国会図書館デジタルコレクション



図42 本草綱目図 卷51：山羊 江戸時代  
李撰：江戸時代刊行、国立国会図書館デジタルコレクション



図45 博物教授法 小学懸図巻之2動物：羊・山羊 1876年  
島1876年、京都市学校歴史博物館蔵・写真転載